

2021年度おやさと研究所特別講座「教学と現代」
「澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義」報告

澤井 義次

2021年度のおやさと研究所特別講座「教学と現代」は、おやさと研究所主催・人間学部宗教学科共催で、澤井義次・天理大学名誉教授の最終講義「生きることの意味とその理解—天理教人間学の地平から—」として、2022年2月25日（金）天理大学ふるさと会館大ホールにおいて開催された。当日は新型コロナウイルスの感染拡大に配慮して、オンラインでも国内外に配信された。会場には73名、オンラインでは45名（いずれも最大時）の参加者があった。

まず永尾教昭・おやさと研究所長が開会挨拶、次に金子昭・同研究所教授が講師紹介と趣旨説明をおこなった。講義の後、活発な質疑応答がおこなわれ、堀内みどり・同研究所主任が開会の挨拶をおこなった。最後に、宗教学科や同大学同窓会（ふるさと会）などから花束の贈呈があった。

この講義において、私は宗教学や現代哲学などの研究成果をふまえて、天理教人間学が開示する生の根源の地平から、生きることの意味について講演した。本題に入るまえに、自らの宗教研究に言及し、おもに次の三つの研究領域から成っていると述べた。それは天理教学研究（天理教教義学、天理教人間学）、宗教学研究（宗教現象学、意味論）、インド哲学研究（ヴェーダ哲学）である。これらの研究領域は、天理教学研究を基盤として有機的に関連していることにも触れた。

そのうえで、天理教人間学の研究に焦点を絞って、生の意味論的パースペクティブをめぐって論じた。おもな講義内容は、以下のとおりである。

1. 生の意味論的な視座—生の根源の地平から—

天理教原典の言葉に込められた意味を読み解き、生きることの意味を掘り下げて理解するために、意味論的な視座を提示した。意味論的に見れば、ふだん当たり前のように思える事物事象は、社会慣習的な意味コードによって構築されたものである。私たちは文化的に構造化された意味の世界に生きているが、表層的な意味次元から深層的な意味次元に至るまで、言葉の意味の重層性の中に生きている。

私たちの心の地平は、意味論的に存在世界に対応している。心の表層は日常的な存在世界に対応しており、心の深層は非合理的あるいは宗教的な意味世界に対応している。言語哲学者の井筒俊彦も言うように、心が表層から深層へ深まるにつれて、存在の深みが次第に開けていく。宗教哲学者の上田閑照によれば、「地平」には「地平の彼方」が存在する。心の地平の彼方へといざなわれるのは、日常的な価値判断や常識がほとんど通用しないような出来事、すなわち、「ふし（節）」に出会ったときである。「おさしづ」には、「ずつない事はふし、ふしから芽を吹く。」（明治27年3月5日）と論されている。ここで「ふし」の語はメタファー（たとえ）である。

哲学者のポール・リクールが言うように、メタファーは「間接的で暗示的で暗黙の仕方ながら、私たちになじみの環境との

日常的な関係がまさに隠しているものを、思いきって言おう」（『生きた隠喩』岩波書店）とする。「ふしから芽を吹く」という隠喩的表現は極めて含蓄深い。たとえば、竹や木には節があるので、竹や木は風雨にも強いし、節から次々と新しい芽が吹き出して、竹や木が次第に大きくなっていく。それと同じように、私たちはさまざまな「ふし」に出会うとき、心のあり方をとらえなおし、「陽気ぐらし」という本来的なあり方を自覚する機会を与えられる。

2. 生きていることの意味とその深み

天理教のコスモロジー（人間観・世界観）によれば、私たち人間は二重の「生のつながり」において生きている。垂直次元では、親神と人間が「をやと子」の人格的呼応関係にあり、水平次元では、私たち人間は親神を「をや」と仰ぐ一れつ（きょうたい）の姉妹の関係にある。この二重の「生のつながり」において、私たちは親神の守護によって生かされて生きている。二重の生のつながりが有機的に連関し合って、存在世界全体が構成されている。

私たちが心の「ほこり」（自己中心的な心遣い）を払って、心を澄ますと、心の地平が次第に深化していく。「おさしづ」には、「どうせこうせこら言わんこれ言えん。言わん言えんの理を聞き分けるなら、何かの事も鮮やかと言う。それ人間という身の内という、皆神のかしもの・かりもの、心一つが我がの理。」（明治23年4月4日補）と論される。原典の言葉が開示する生の意味の深みを理解するには、「言わん言えんの理を聞き分ける」ことが肝心である。それは私たちの身体が親神からの「かりもの」であり、心だけが自分のものであるとの「かしのもの・かりもの」の教理である。

3. 「かしのもの・かりもの」の教理—生きることの意味を理解するために—

生の意味の深みを開くには、「かしのもの・かりもの」の教理の理解が不可欠である。この教理に込められた意味の深みを心底から理解するとき、「言わん言えんの理を聞き分ける」ことができる。私たちの身体が「ほんになる程、かりものにちがひないと、理をかんじる」（『正文遺韻抄』）ことができる。ここで、一つの具体例として松村吉太郎（1867～1952）という先人の逸話を取り上げた。松村は26歳で激しい赤痢にかかり、生死の境を彷徨ったとき、教祖の直弟子の一人、榊井伊三郎が松村を見舞いに訪れた。榊井は言った、「松村さん。心がたおれたら身がたおれる。心が死ねば身上も死ぬ。心が生きたら身上は生きるのや。身上は神様からの借物や、何も案じることいらん…。松村は「その短かい言葉が、ピーンと胸にひびいた。もう何年という間、耳がたこになるほど聞いたお話だ。（中略）今日ばかりは『そうだ、たしかにそうだ！』と思えた」（松村吉太郎自伝『道の八十年』養徳社）。この逸話は教理の知的理解ばかりでなく、教理を心に感じとることの大切さを端的に物語っている。

この道の信仰を理解するには、原典の言葉に込められた意味の深みを理解することが肝心である。原典の言葉には、日常言語の意味のうえに、いわば「意味の重ね書き」がなされている。原典の意味の深みを理解する心の地平を開くところに、生きることの意味を理解できることになる。そこに「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という」と教えられる、私たち人間の本来的な生き方を実践できるようになっていく。